

土佐のわらべ

第427号《第449回（2017. 6. 8） 子どもの本の読書会記録》参加者4人・文書参加3人

『青い鳥文庫ができるまで』 岩貞 るみこ/作 講談社

本がどのようにできるのかを書いたものは多々ありますが、本書はとってユニーク。最初に「この本は、正真正銘のノンフィクションです！事実度99%以上、本ができあがるまでのドキドキ度は99.9%以上リアルですが、綾小路先生や緑川カエル先生、モモタは、実際にはいません。書店さんで、『白浜夢一座がいく！』という本をさがさないでね。」という作者からの断り書きがあります。その本は「めっちゃおもしろいです！」と一言本文にあるだけなのです。

青い鳥文庫の『白浜夢一座がいく！』14巻目は、累計200万部突破目前の人気シリーズ。12月の発売を決めたものの、原稿は締め切りを大幅に遅れ、イラストは校了ギリギリ。次々とトラブル発生。一冊の本がどういう風に作られ、読者の元に届くのかを、スリリングにスピード感をもって語られている奮闘記です。

本書は、各章に作家や編集長などのコメントや専門用語の解説があり、理解しやすい内容となっています。巻末の「折り」は、紙質を変えていて特別感があります。子どもたちがお小遣いで買えるように、でも面白く楽しくなるように頑張って価格を抑えるための工夫を凝らしています。

国語教育もかねている児童書に、まちがいがあってはいけません。すべての漢字にルビをつけ、漢数字は子どもたちが正しく書けるように気をつけています。正しい日本語、正しい言葉。作者と校閲、それぞれの言葉に対する思いも熱いです。児童書の間違ひは、万死に値する・・納得です。

原稿があれば、もう本が仕上がったも同然と思っていたけれど、とんでもない。編集者、作家、画家、校閲や印刷所、取次、書店など、本当に多くの人の努力や工夫、そして信頼がつながってこそだと分かりました。明るくノリのいい会話の中に「児童書が売れなくなったこと」「児童書を作る予算が少ないこと」「2011年の東日本大震災で製紙工場が被災し、出版業界が大変だったこと」などもさり気なく書きこまれており、業界の現状もリアルに伝わってきました。

参加者の皆さんからは「子どもたちが興味を持って読んでもらえる内容になっている。本の価値を知り、本を大切にしてくれると嬉しい」「読者に寄り添い、安心して読めるようにという児童書の編集者のポリシーを感じた」「コンピューターがない時代、どんな風に本を作っていたんだろう？その時代の苦勞を思うが、最終的には昔も今も、本は人と人が向き合って作るものだと思った」「子どもたちにとって、一冊一冊が青い鳥になってほしい」などの感想が聞かれました。

作者は多くのノンフィクションを書いており「子どもたちの未来には、いろんな世界が待っているよ」と教えてくれています。最新刊は『もしも病院に犬がいたら こども病院ではたらく犬、ベイリー』。読んでみてくださいね。

(C. O)